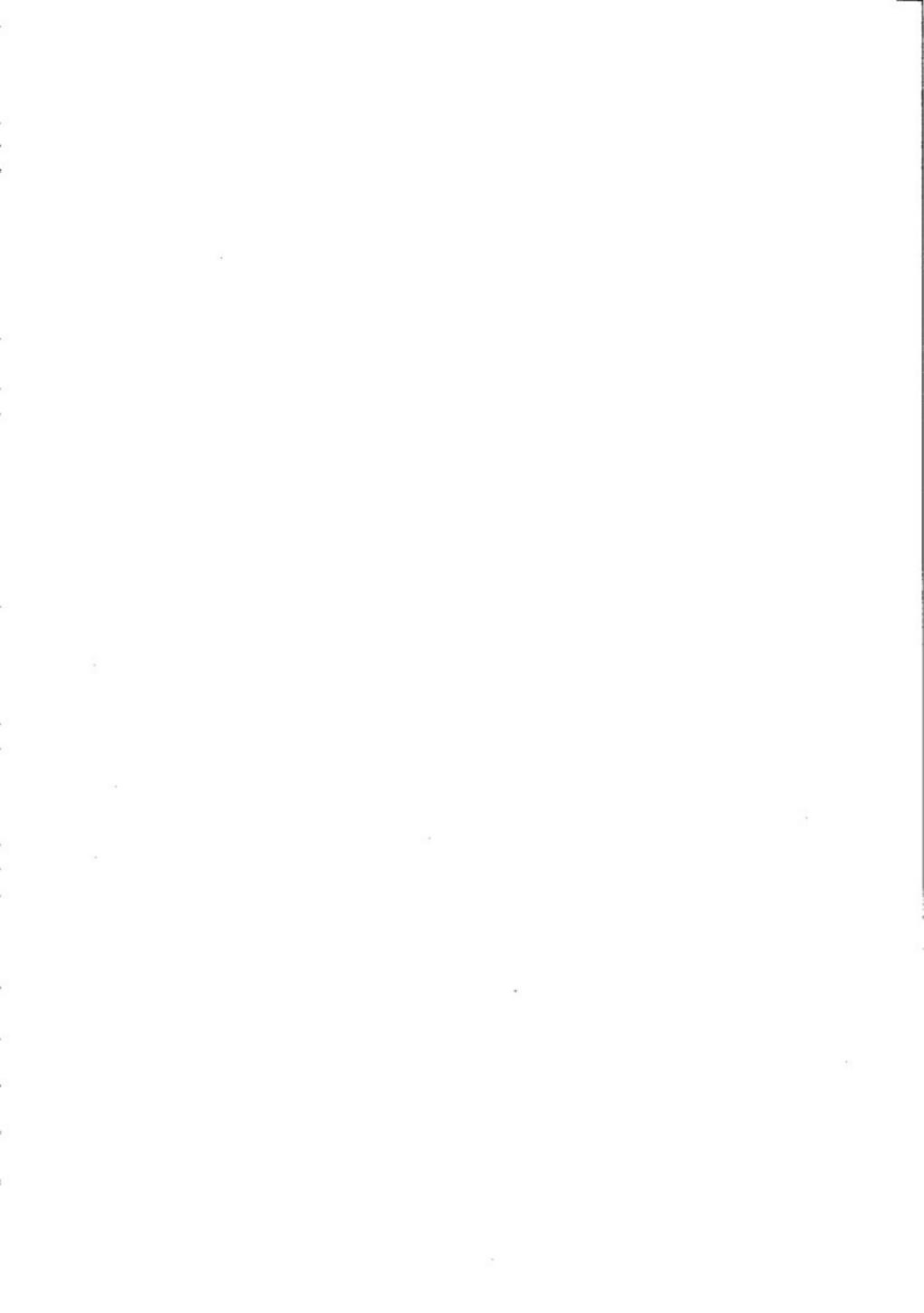


八尾南遺跡(第 28 次調査)

2008 年

財団法人 八尾市文化財調査研究会



八尾南遺跡(第 28 次調査)

2008 年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

は し が き

八尾市は大阪府の東部、旧大和川によって運ばれた土砂によって形成された河内平野の中心部に位置しています。古くから人々の生活の場として繁栄していた地域であり、現在も地面の下には先人が残した活動の痕跡や遺物といった貴重な文化遺産が数多く残されています。

近年、都市開発に伴う各種土木工事は増加の一途を辿っています。その中で消失の危機に晒される文化財の記録保存を行い、調査・研究を通じて明らかになった知見を文化遺産とし、後世に伝えていくことが我々に課せられた責務と考えています。

本書は、平成18年度に実施いたしました八尾南遺跡(第28次調査)の調査成果を収録したものであります。八尾南遺跡は、古くは1万年以上昔の地層から石器が出土することで知られている遺跡です。今回の調査では古墳時代前期から現代にかけての遺構面を複数確認することができました。特に、平安時代から中世にかけての条里水田は、当耕作地における土地利用の変遷を知る上で重要な成果といえます。

本書が地域史解明はもとより、埋蔵文化財の保護・普及の一助になれば幸いです。

最後に、発掘調査の開始当初から本報告の刊行にいたるまで、数々のご尽力をいたしました関係各位の皆様方に心より御礼申し上げると共に、今後尚一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成20年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 岩崎健二

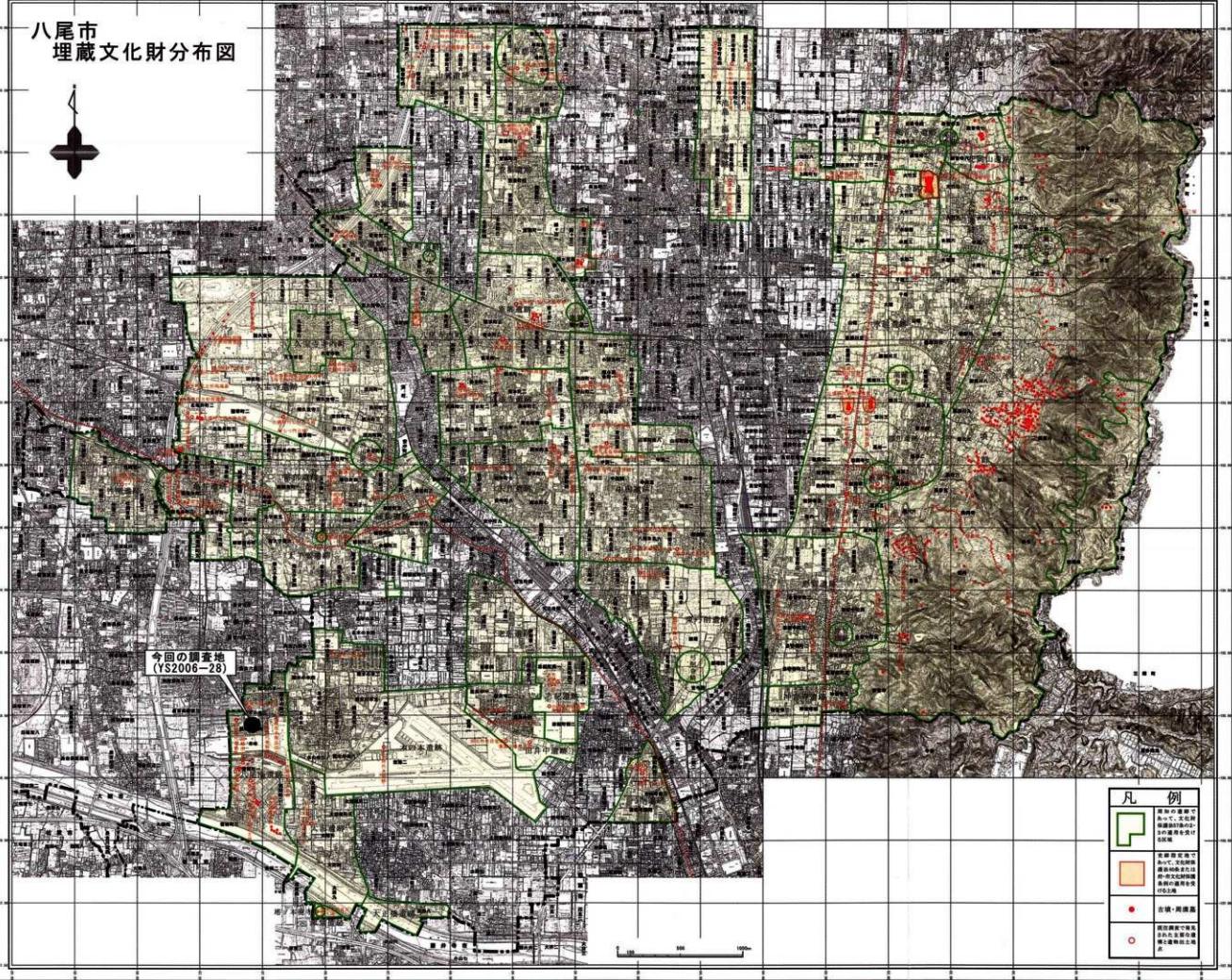
例　　言

- 1 本書は、大阪府八尾市西木の本四丁目地内で実施した、市営大正地区道路整備に伴う文化財発掘業務の報告書である。
- 1 本書で報告する八尾南遺跡第28次(YS 2006-28)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
- 1 現地調査は、平成18年2月6日～平成18年3月30日(実働30日間)にかけて、成海佳子を調査担当者として実施した。調査面積は約724m²である。
- 1 現地調査にあたった調査補助員は、飯塚直世・岡　真也・北野兼史・芝崎和美・鷹羽侑太・高津雅永子・玉野富士江・中村百合・西口佳奈・橋本黄士である。
- 1 内業整理および本書作成にかかる業務は、平成19年12月10日から開始し、平成20年3月19日に完了した。
- 1 内業整理および本書作成にあたった調査補助員は、遺物実測一市森千恵子・永井律子・中村・村井厚三・村田知子・和田直樹である。本書の執筆及び編集は成海が担当した。
- 1 調査に関しては、写真・実測図等の記録とともに、カラースライドを作成している。広く活用されることを希望する。

凡　　例

- 1 本書掲載の地図は、大阪府八尾市発行の2,500分の1地形図(平成8年7月発行)、八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』(平成19年度版)を使用した。これ以外の地図を使用する場合は適宜明示した。
- 1 本書で用いた標高の基準はT.P.値(東京湾標準潮位)である。
- 1 本書で用いた方位は国土座標第VI系(世界測地系)の座標北を示している。
- 1 本書で用いた挿図の縮尺は、各挿図内のスケールに示している。
- 1 遺物実測図の断面は陶磁器・須恵器を黒、それ以外を白とした。
- 1 訳・参考文献は各章末に記した。

八尾市
埋蔵文化財分布図



凡 例
既知の埋蔵地 （既て、古墳や古跡等の可能性ある場所）
未確認埋蔵地 （既て、古墳や古跡等の可能性ある場所）
古墳・古跡
未確認埋蔵地で古墳・古跡の可能性あり

本文目次

はしがき	
八尾市埋蔵文化財分布図	
例言	
凡例	
第1章 はじめ	1
1 遺跡の概要とその環境	1
2 条里制について	4
第2章 調査の方法と経過	7
第3章 調査概要	8
1 基本層序	8
2 検出遺構と出土遺物	10
第4章まとめ	21

挿図目次

第1図 調査地周辺図	2
第2図 調査地周辺の条里と国境	5
第3図 条里復元図	5
第4図 調査区設定図	7
第5図 土層断面図(西壁・セクション)	9
第6図 河川1内杭検出状況平面図・立面図	11
第7図 溝7平断面図	11
第8図 土層断面図(北壁)	14
第9図 平面図	15
第10図 出土遺物実測図1	16
第11図 出土遺物実測図2	17

表 目 次

第1表 調査地一覧表	3
第2表 検出遺構一覧表	18
第3表 出土遺物一覧表	19

図 版 目 次

図版一【第1面】

第1面西部(西から) 第1面東部(東から)

図版二【第2面】

第2面西部(西から) 第2面東部(東から)

図版三【第3面】

第3面西部(南から) 第3面東部(東から)

図版四【第4面】

第4面溝40(南から) 和同開塗出土状況(北から)

図版五【調査前～第1面西部】

調査前の状況 機械掘削の状況 調査杭設置 人力掘削開始

A区河川1掘削 A区河川1上層遺構 E区河川1杭周辺掘削 第1面平板測量

図版六【第1面中央～東部】

D～F区河川1下層杭検出状況 E～F区同 E区同

J区溝7検出時 溝7完掘 溝7トレンチ掘削 J区河川8掘削

図版七【第2面】

E区河川12掘削 F区同 I区河川13掘削 I区大畦検出時 H区以東河川12・大畦

H～I区河川13・大畦 J～K区河川13・大畦 セクションG東面

図版八【第3面～第4面】

E～F区大畦第3面～人力掘削 I～J区同 J～K区同

土坑27・小穴28・29 土坑36 溝37・38 北側壁面実測 G区溝40周辺平板測量

図版九【出土遺物1】

河川1出土遺物

図版十【出土遺物2】

河川1出土遺物 河川11出土遺物 河川12出土遺物 河川13出土遺物

大畦盛土内出土遺物 溝42出土遺物

第1章 はじめに

1 遺跡の概要とその環境

八尾南遺跡は大阪府八尾市南西部に位置している。現在の行政区画では若林町1～3丁目、西木の本1～4丁目の西部にあたり、東西約0.5km、南北約1.3kmがその範囲とされている。

地理的には旧大和川及びその支流河川による活発な沖積作用によって形成された河内平野の南西部にあたる。地質的には概ね沖積地であるが、遺跡の南には羽曳野丘陵から連なる河内台地が、西には上町台地が存在しており、低地から台地への地形変化点にもなっている。遺跡北端部の現地盤は標高10m前後と最も低い。南にかけては緩やかに高くなり、南端部では12m前後となる。

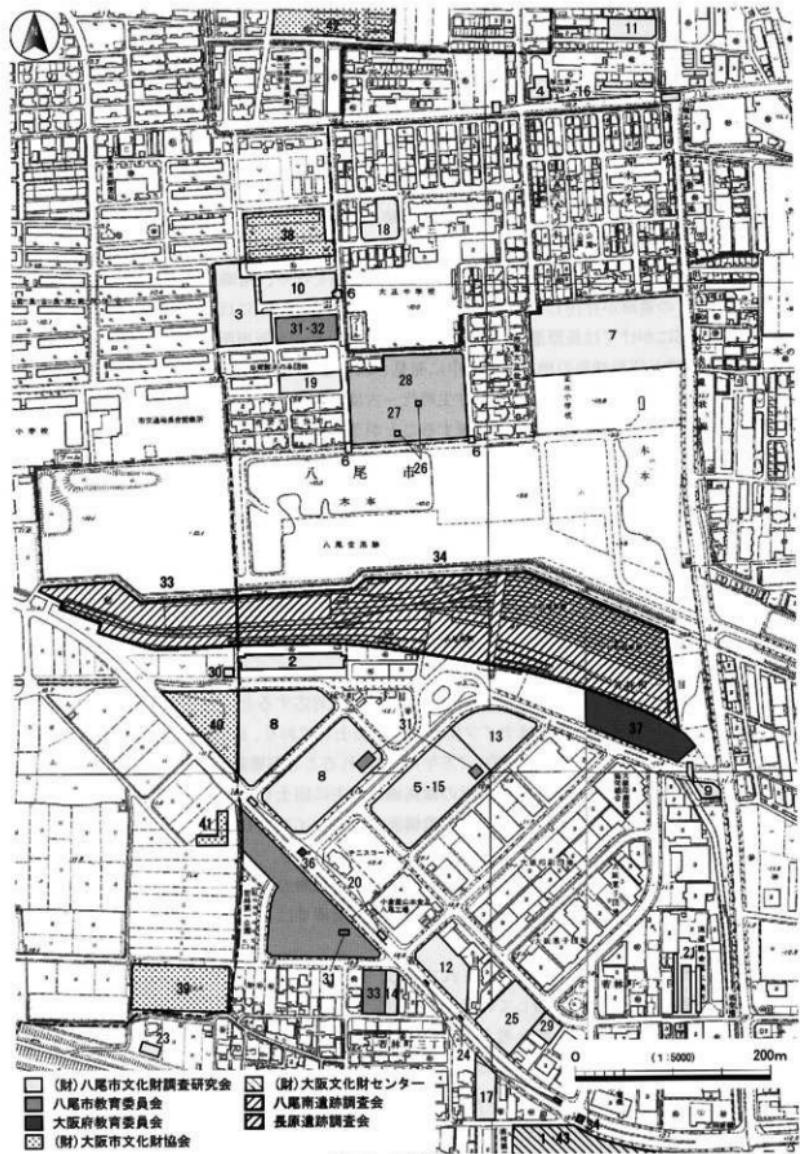
周辺には多くの遺跡が存在しており、北東には木の本遺跡、南東には太田遺跡が、市境を挟んで北部から東部にかけては長原遺跡がそれぞれ隣接している。大阪市所在の長原遺跡とは特に関係が深く、同遺跡が昭和48年の地下鉄工事中に発見されたことが当遺跡発見の端緒となっている。長原遺跡調査会による発掘調査の結果、弥生時代～古墳時代にかけての居住域や墓域が確認された。遺跡は東側の八尾市域においても連続することが予測されたため、同調査会による試掘調査が行われ、その結果、長原遺跡と連続性が認められる遺物包含層の存在が確認された。そして、これを受けて発足した八尾南遺跡調査会による発掘調査の結果、当遺跡が旧石器時代～中世にかけての複合遺跡であることが明らかとなった。その後、八尾市教育委員会によって行われた遺跡範囲確認調査によって遺跡範囲が拡大することが確認された。地下鉄完成後は区画整理が完了した八尾南駅南側を中心に土地開発が活発となり、それらに伴う発掘調査が大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財センター・八尾市教育委員会・当調査研究会によって継続的に行われている。

以下に各時代の八尾南遺跡を概観する。数字は既往調査地で示しており、位置については第1図を、調査内容については第1表を参照されたい。

旧石器時代では、長原遺跡における旧石器時代包含層に対応すると考える地層からサヌカイト剥片が出土している。長原遺跡ではナイフ型石器等が出土しており、出土層には始良Tn火山灰(約2.2万年前)や大山下のホーキ火山灰(約1.7万年)が含まれることが確認されている。周辺では当該期の開析谷が確認されており、遺物は付近の微高地から主に出土している。また、34では、ホーキ火山灰包含層直下に帰属すると想定される遺構面から、ナイフ型石器・角錐状石器・スクレイバー等の石器のほか、接合関係が認められる剥片が出土している。

縄文時代では河道や溝等が検出されており、遺構からの遺物の出土もみられる。遺物では8・32で出土した縄文時代早期に比定される有舌尖頭器が、遺構では5で検出された後期の住居跡が代表的なものである。

弥生時代では主に居住域・墓域が確認されている。遺構は遺跡南部の微高地上に集中する傾向がみられ、一帯が居住地として適していたことを示している。そして低湿な環境であった北部では、主に水田が営まれていたものと考えられる。前期に関する成果では、15で古段階の壺が出土しており、5ではしがらみが検出されている。中期では17で居住域が検出されている。生産域関連では、13で水田が、42で耕作土とも考えられる粘質土が確認されている。後期では8・21・34・43で居住域が確認されている。特に43で検出された水田を伴う住居群は、氾濫堆積物に覆われた



第1図 調査地周辺図

第1表 調査地一覧表(第1回に対応)

番号	調査名(略号)	調査機関	面積(㎡)	種別	上な時代	文献
1	八尾市第1次 (1959-01)	八文研	2600 東伏見	古墳時代 平安時代	弥生時代～古墳時代 平安時代～鎌倉時代	鶴林教 1964「3. 八尾南遺跡(第1回測量)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告5』
2	八尾市第2次 (1959-02)	八文研	2500 東伏見	古墳時代 平安時代	古墳時代 平安時代	鶴林教 1964「3. 八尾南遺跡(第2回測量)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告5』
3	八尾市第3次 (1959-03)	八文研	900 生坂城・尼住坂	古墳時代 平安時代	古墳時代 平安時代	深田昌樹 他 1982「八尾南遺跡(第3回測量)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告5』
4	八尾市第4次 (1959-04)	八文研	630 尼住坂?	古墳時代	古墳時代	鶴林教 1965「3. 八尾南遺跡(第4回測量)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告5』
5	八尾市第5次 (1959-05)	八文研	4500 生坂城	古墳時代 平安時代	古墳時代 平安時代	鶴林教 1968「7. 八尾南遺跡(第5回測量)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告10』
6	八尾市第6次 (1959-06)	八文研	1200 尼住坂?	古墳時代～平安時代	古墳時代～平安時代	西村公助 1969「4. 八尾南遺跡(第6回測量)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告10』
7	八尾市第7次 (1959-07)	八文研	3043 生坂城	古墳時代 平安時代	古墳時代 平安時代～播磨付近	西村公助 1969「7. 八尾南遺跡(第7回測量)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告10』
8	八尾市第8次 (1959-08)	八文研	9961 尼住坂	古墳時代 平安時代	古墳時代 平安時代～古墳時代	西村公助 1969「1. 八尾市遺跡(第8回測量)」『八尾市遺跡』、『(財)八尾市文化財調査研究会報告11』
9	八尾市第9次 (1959-09)	八文研	2085?	古墳時代	古墳時代	鶴林教 1968「10-11. 八尾南遺跡(第9回測量)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告11』
10	八尾市第10次 (1959-10)	八文研	696 生坂城・尼住坂	古墳時代 平安時代	古墳時代 平安時代	鶴林教 1969「12. 八尾南遺跡(第10回測量)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告12』
11	八尾市第11次 (1959-11)	八文研	100?	古墳時代	古墳時代	鶴林教 1969「13. 八尾南遺跡(第11回測量)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告12』
12	八尾市第12次 (1959-12)	八文研	860 尼住坂	古墳時代	古墳時代	鶴林教 1969「14. 八尾南遺跡(第12回測量)」『八尾市遺跡』、『(財)八尾市文化財調査研究会報告13』
13	八尾市第13次 (1959-13)	八文研	1800 尼住坂・河原	古墳時代 平安時代	古墳時代 平安時代	鶴林教 1969「15. 八尾南遺跡(第13回測量)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告13』
14	八尾市第14次 (1959-14)	八文研	100? 尼住坂?	古墳時代 平安時代	古墳時代 平安時代	鶴林教 1969「16. 八尾南遺跡(第14回測量)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告13』
15	八尾市第15次 (1959-15)	八文研	846 尼住坂?	古墳時代	古墳時代	西村公助 1969「17. 八尾南遺跡(第15回測量)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告13』
16	八尾市第16次 (1959-16)	八文研	97.38?	-	-	西村公助 1969「18. 八尾南遺跡(第16回測量)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告13』
17	八尾市第17次 (1959-17)	八文研	4356 尼住坂	古墳時代	古墳時代	西村公助 1969「19. 八尾南遺跡(第17回測量)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告13』
18	八尾市第18次 (1959-18)	八文研	3523 尼住坂	古墳時代	古墳時代	西村公助 1969「20. 八尾南遺跡(第18回測量)」『平成4年八尾市文化財調査研究会事業報告』
19	八尾市第19次 (1959-19)	八文研	700? 尼住坂	古墳時代 平安時代	古墳時代 平安時代	西村公助 1969「21. 八尾市遺跡(第19回測量)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告14』
20	八尾市第20次 (1959-20)	八文研	46?	古墳時代	古墳時代	西村公助 1969「22. 八尾市遺跡(第20回測量)」『平成4年八尾市文化財調査研究会事業報告』
21	八尾市第21次 (1959-21)	八文研	7086 尼住坂	古墳時代 平安時代	古墳時代 平安時代	坪井真一 1969「IV. 八尾市遺跡(第21回測量)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告14』
22	八尾市第22次 (1959-22)	八文研	340?	古墳時代	古墳時代	高木千秋 1969「IV. 八尾市遺跡(第22回測量)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告14』
23	八尾市第23次 (1959-23)	八文研	200? 尼住坂	古墳時代	古墳時代	岡田清一 1969「IV. 八尾市遺跡(第23回測量)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告14』
24	八尾市第24次 (1959-24)	八文研	34?	古墳時代	古墳時代	高木千秋 1969「IV. 八尾市遺跡(第24回測量)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告14』
25	八尾市第25次 (1959-25)	八文研	294 尼住坂?	古墳時代	古墳時代	新藤千尋 2003「IV. 八尾市遺跡(第25回測量)」『平成14年八尾市文化財調査研究会事業報告』
26	八尾市第26次 (1959-26)	八文研	56? 尼住坂	古墳時代 平安時代	古墳時代 平安時代	新藤千尋 2005「IV. 八尾市遺跡(第26回測量)」『平成15年八尾市文化財調査研究会事業報告』
27	八尾市第27次 (1959-27)	八文研	1416? 尼住坂	古墳時代	古墳時代	木田敏雄 1981「八尾市南遺跡の歴史と発展」『八尾市史』
28	八尾市第28次 (1959-28)	八文研	約722? 尼住坂	古墳時代 平安時代	古墳時代 平安時代	木田敏雄 1982「八尾市文化財調査研究会事業報告1980-1981年度」『(財)八尾市文化財調査研究会報告24』
29	八尾市第29次 (1959-29)	八文研	24 尼住坂?	古墳時代	古墳時代	木田敏雄 1983「八尾市文化財調査研究会事業報告25」『(財)八尾市文化財調査研究会報告25』
30	長原町第1次 (1959-01)	八文研	-	-	-	木田敏雄 1984「2. 長原町(第1回測量)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告26』
31	八尾市道筋 御園町御園町	市教委	199?	尼住坂	古墳時代 平安時代	木田敏雄 1985「1. 八尾市道筋(第1回測量)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告27』
32	八尾市道筋	市教委	-	-	-	木田敏雄 1986「2. 八尾市道筋(第2回測量)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告28』
33	八尾市道筋	市教委	約233 尼住坂?	古墳時代	古墳時代	木田敏雄 1987「3. 八尾市道筋(第3回測量)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告29』
34	八尾市道筋	八尾市教委	36000 尼住坂・轟坂・轟坂	古墳時代 平安時代	古墳時代 平安時代	山岸一郎 1991「IV. 八尾市道筋(第4回測量)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告30』
35	長原町	市教委	9000? 尼住坂・尼住坂	古墳時代 平安時代	古墳時代 平安時代	木田敏雄 1991「八尾市長原町・大字長原町(第1回測量)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告31』
36	八尾市道筋	府教委	-	-	-	木田敏雄 1992「八尾市長原町(第2回測量)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告32』
37	八尾市道筋	府教委	3016? 尼住坂	古墳時代	古墳時代	木田敏雄 1993「八尾市道筋(第3回測量)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告33』
38	長原町	大文協	100? (約26-29)	生坂城	古墳時代	山岸一郎 1994「IV. 八尾市長原町(第4回測量)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告34』
39	長原町	大文協	100? (約26-41)	生坂城	古墳時代	山岸一郎 1995「IV. 長原町(第5回測量)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告35』
40	長原町	大文協	2270? (約26-31)	自然段落	古墳時代	山岸一郎 1996「IV. 長原町(第6回測量)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告36』
41	長原町	大文協	- (約26-50)	集落	古墳時代	木田敏雄 1997「IV. 長原町(第7回測量)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告37』
42	長原町	大文協	1008? (約26-51)	集落	古墳時代	木田敏雄 1998「IV. 長原町(第8回測量)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告38』
43	八尾市道筋	大文七	-	-	-	江美和子 他 2002「長原町御園町御園町(第9回測量)」

調査地名開示
府教委: 大阪府教育委員会、文教系: 八尾市教育委員会、八文研: (財)八尾市文化財調査研究会
八尾市調査会: 八尾市道筋調査会、大文協: (財)大阪市文化財協会、長原町調査会: 長原町道筋調査会

状態で遺構が良好に残存しており、周堤を持つ堅穴住居内には壁に立てかけられた梯子やその他の構造物がそのまま遺存していた。墓域は1で確認され、方形周溝墓が12基検出されている。また、特筆すべき遺物として、小形仿製鏡破片が2で出土している。

古墳時代になると、これまででは遺構が希薄であった北部においても居住域が確認されるようになり、南部では居住域の縁辺部において方墳が検出されている。初頭から前期にかけては、13・34・37で居住域と墓域が確認された。中期から後期にかけては引き続き存続する13・34の居住域と墓域のほかに、3・8・12・18・25・29で新たに居住域や墓域が確認されるようになる。遺物に関しては8で韓式系土器と鞍が、3・18・34で韓式系土器が出土している。これらの遺物から從来とは異なる文化の流入が窺え、新たに展開する居住域では渡来人関連の成果が特に注目される。生産域については中央部から北部にかけて確認されており、3・7・10・34で水田面が検出されている。古墳時代の集落の大半は後期になって廃絶を迎える。西接する長原古墳群もこの時期に終焉することは、一帯の社会情勢における大きな変化を示唆するものと捉えられている。

飛鳥～奈良時代では遺物・遺構は点的に確認されており、全体的には希薄であるといえる。23では中世～近世の耕作土の直下に弥生時代後期の遺物包含層が存在していることから考えると、当該期の地層は後世の耕地改変によって大きく削平されてしまった可能性が考えられる。西接する長原遺跡では大部分が水田であったことを考えると、当遺跡も同様に生産域であったものと思われる。

平安時代になると条里制が施行され、以後は正方位を基準とした区画に則った開発が行われる。居住域は後期の集落が1で確認されたのみであり、その大半は生産域となっている。明確な生産遺構は、低湿であったと考えられる遺跡北部に集中しており、3・7・10・27・31で氾濫堆積物に覆われた水田が検出されている。これに対して南部では、下面遺構として正方位に沿った耕作溝が検出されるくらいである。

鎌倉時代～近世にかけては、遺跡全域が生産域となり居住域は確認されていない。耕作地は度々洪水に見舞われており、地層断面にその痕跡をみることができる。このような状況はやはり北部で顕著であり、42では洪水砂を芯にする島島状遺構が検出されている。近世以降は洪水も次第に沈静化する傾向にあるよう、一帯は現代に至るまで低湿な環境下で水田が営まれ続ける。

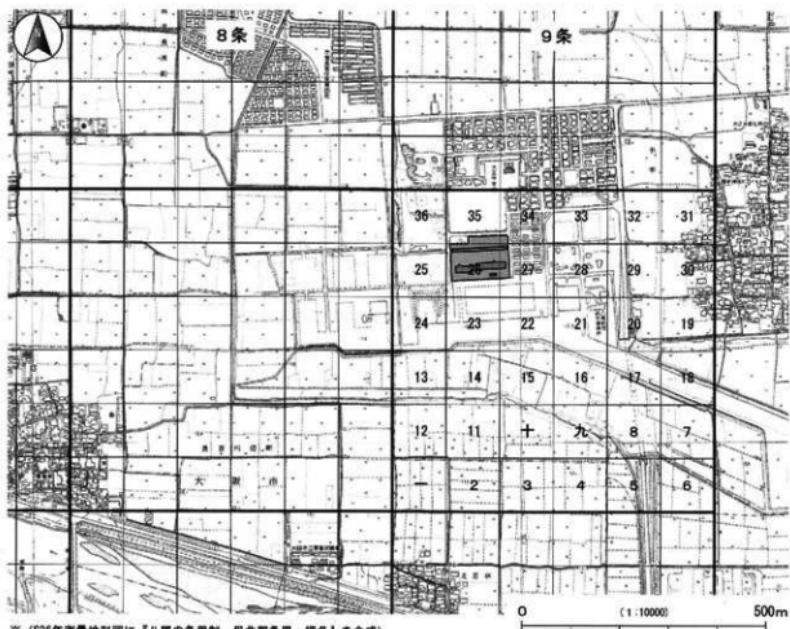
2 条里制について

条里制とは日本古代における耕地の区画法である。土地を郡単位で6町(約654m)四方に区画して「里」とし、里をさらに1町(約109m)四方に区切って36区画にわけ、そのひとつを「坪」とした。○国○郡○条○里○坪とすることでその土地の位置を明確にできる。主に農地などの単位として利用された。班田收授法に基づく律令国家の土地把握の方法であると考えられているが、発掘成果から導き出される条里制の施行時期は平安時代が大多数を占める。条里制地割は現代においても大きな開発が及んでいない地域で部分的に残っており、空中写真や地図上において正方位を基準とした方格地割に見出すことができる。

八尾南遺跡の所在する地域は、平安時代前期の『延喜式』によるところの河内国丹比郡に属している。11世紀頃に丹比郡は大津道を境にして丹北・丹南の2郡に分割され、以後は丹北郡の所屬となる。



第2図 調査地周辺の条里と国境



第3図 条里復元図

第2図は大阪府発行の昭和36年測量地形図上に条里を復元したものである。耕作地・水路などの区画から、ほぼ正方位に則った方格地割が認められる。また、丹北郡の坪名は西南隅を一ノ坪として北西隅を三六ノ坪とする坪付を行う。現代に残る坪名(漢数字で記載)から残りの坪名を復元し里境を導いた。

今回の調査区は、復元図上では丹北郡九条□里二六・二七ノ坪にあたる。調査の結果、正方位を基準とする河川が検出された。ところで、現在の調査地周辺における宅地・道路部の区画は、復元した条里区画とは一致せずにやや西に振る傾向が認められる。八尾空港とその周辺の道路の軸も同様であることから、現代の区画整備の段階では旧来の条里地割が放棄されていることになり、周辺の開発状況から判断して八尾空港の前身である阪神飛行場の設営がその契機になったと考えられる。

註 丹北群における条里呼称は、条名は数字で、里名については固有名で与えられている。本調査地の里名は不明である。

註 本章は、島田裕弘 2007『八尾南遺跡第26次調査』—(財)八尾市文化財調査研究会報告102 (財)八尾市文化財調査研究会 を一部改変して引用した。

参考文献

- ・米田敏幸 他 1981『八尾南遺跡-大阪市高速電気軌道2号線建設に伴う発掘調査報告書-』八尾南遺跡調査会
- ・櫻橋利光 1982『八尾市紀要第6号 八尾の条里制』八尾市教育委員会・八尾市史編さん室
- ・永島輝臣 様 他 1982『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告II-大阪市高速電気軌道2号線建設に伴う発掘調査報告書-』(財)大阪市文化財協会
- ・西村公助 1987「VI. 八尾南遺跡(第7次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告41』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・福田英人 1989『八尾南遺跡-旧石器出土第3地点-』大阪府教育委員会
- ・原田昌則 1995「I. 八尾南遺跡第8次調査(YS87-8)」「八尾南遺跡(財)八尾市文化財調査研究会報告47』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・岡田清一 1999「IV. 八尾南遺跡(第23次調査)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告63」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・辻美紀 他 2002『長原遺跡発掘調査報告IX-市営長吉長原東第2住宅建設工事に伴う発掘調査報告書-』(財)大阪市文化財協会
- ・(財)大阪府文化財センター 2006『大阪府立弥生文化博物館平成18年冬季企画展 弥生の村の風景-八尾南遺跡の最新成果-』

第2章 調査の方法と経過

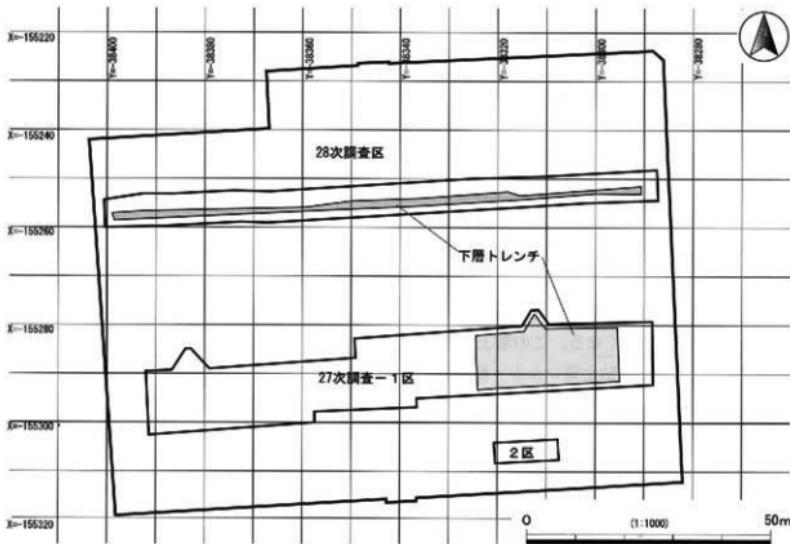
今回の調査は市営大正住宅地区道路整備に伴う調査で、当調査研究会が八尾南遺跡内で行った第28次調査である。調査対象範囲は道路部分(上幅6.35×114mm)で、地表下約2m程度までを上層調査とし、以下の下水管渠築造部分について幅1m・深さ1m程度の範囲を下層調査とした。調査面積は約724m²である。

調査は2007年2月6日から開始、調査区設定・機械掘削を行った。土置き場・余地・ベルトコンベア数量の都合から、ほぼ中央部を境に東半部と西半部に2分して調査面毎に掘削・調査を行った。機械掘削に並行して、調査坑の設定やレベル移動を行った。調査坑の設定には、26次調査で使用した国土座標第VI系(新座標:世界測地系)の3級基準点を用いた。

全面調査は2007年3月15日に終了した。同時に下層調査を開始し、3月26日に終了した。その後、一部残った平断面実測に並行して後片付けや撤収作業を行い、3月30日に調査全工程を終了した。

掘削は重機による機械掘削と人力掘削を併用した。現地表下0.7~0.9mの機械掘削にて近世以降の堆積層及び擾乱を除去し、以下0.4~0.6mを人力掘削により調査を行った。最終的に4枚の遺構面を検出した。

地区割については調査区が東西に長いため、西から10mごとにA~L区とした。西端はY=-38400、東端はY=-38287付近にあたる。



第4図 調査区位置図

第3章 調査概要

1 基本層序

今回の調査では、調査区にほぼ平行する河川を検出したため、基本的な地層は調査区西側壁面を参考に、第1～13層を用いた。なお、第14層以下は下層掘削で確認した地層である。調査地の現状は旧市営住宅を取り壊した跡地で、現地表面の標高はT.P. +10m前後を測り、西側がわずかに高い。

第0層：八尾空港及び旧市営住宅の建築・解体に伴うとみられる盛土・擾乱層。解体に伴うとみられる擾乱層は東半部に集中する。大半は第4層(現地表下1.5m)までに収束するが、深いものは第13層(現地表下2.0m)にまで達している。その直下には空港建設以前の作土などからなる0-1・0-2・0-3層が所々で遺存していた。

第1層：明褐色疊混粘土質シルト、層厚0.2～0.3m。近世の作土層である。上面の標高はT.P. +9.2～9.4mで、東が若干高い。上面が第1面で、この層上面では河川・土坑・耕作溝を検出した。

第2層：灰褐色疊混砂質シルト、層厚0.1～0.3m。第1層に伴う床土であろう。粘性が強く淘汰の良い搅拌層である。

第3層：明褐色粗粒砂、層厚0～0.3m。洪水砂または河川埋土と考えられる。層位から、第1面で検出した河川⑩-1層に相当する可能性がある。

第4層：灰色細粒砂混粘土質シルト、層厚0.2～0.3m、中世の作土層である。上面には足跡や踏込み等が見られ、第3層に覆われている。上面の標高はT.P. +8.5～9.0m程度である。この層上面が第2面で、大畦・水田を検出した。

第5層：灰褐色細粒砂混粘土質シルト、層厚0.2～0.4m、中世の作土・床土層である。上位の第4層と同じく、波状痕跡・踏込み等が見られる。

第6層：暗灰褐色疊混粘土質シルト、層厚0.2～0.4m、中世の床上-農地のベースで、第2面の大畔はこの層上面から構築されている。上面の標高はT.P. +8.5～8.9mで、大畔直下が最も高い。

第7層：灰白～黒灰色粘土質シルト混粗粒砂、層厚0.1～0.2m。炭や古墳時代中期の遺物を含むブロック層で、整地の可能性がある。大畦直下に見られる。

第8層：青灰色砂質シルト・黒灰色疊混粘土質シルトのブロック、層厚0.1～0.3m。第7層同様整地層と考えられ、大畦(直下)で層厚を増す。

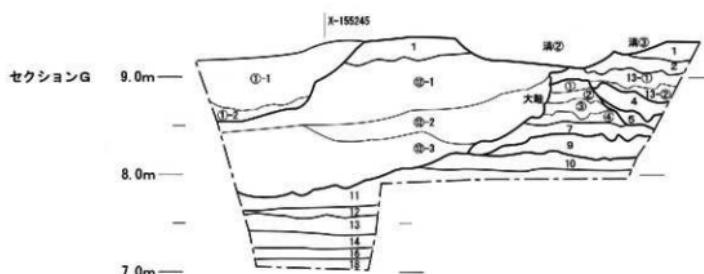
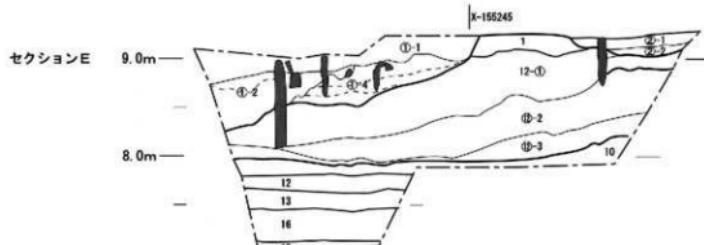
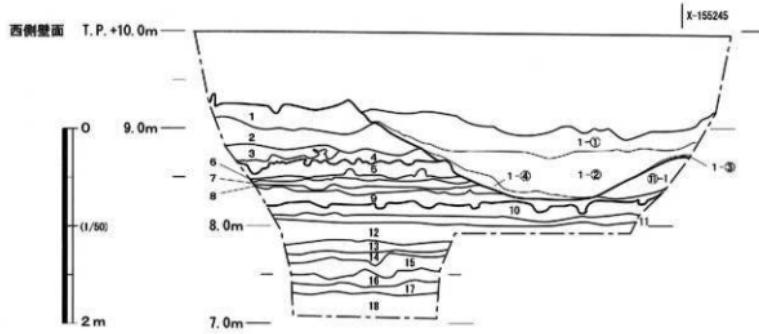
第9層：青灰色砂質シルト、層厚0.1～0.3m。上面の標高はT.P. +8.5～8.3mで、この層も大畦直下が高くなる。この層上面が第3面で、ピット・土坑・溝等を検出した。

第10層：青黒色疊混粘土質シルト・粗粒砂の互層、層厚0.1～0.6m。中央部で層厚を増し、ラミナが認められることから、河川流路を形成していたものと考えられる。

第11層：青灰色粘土質シルト、層厚0.1～0.3m。粘性の低い地層である。

第12層：青黑色砂質シルト、層厚0.2m前後。

第13層：黒灰色粘土質シルト、層厚0.1～0.2m。締りの良い土壤化層である。上面の標高はT.P. +7.6～8.0mで、東が高い。この層上面が第4面で、ここでは溝を検出した。



- 1 青褐色膠泥粘土質シルト (第1面)
- 2 黒褐色膠泥粘土質シルト
- 3 黑褐色腐泥砂
- 4 灰色細粒砂泥粘土質シルト
- 5 灰褐色細粒砂泥粘土質シルト (第2面-作土)
- 6 塗灰褐色膠泥粘土質シルト (第2面-作土)
- 7 灰白～黑褐色粘土質シルト泥質粉砂 (盆地？-古環境時代中期の遺物か?)
- 8 青灰色粉質シルト・黑色細粒砂泥粘土質シルトの細かいブロック (盆地?)
- 9 青灰色粉質シルト・鐵粉砂の互層
- 10 青褐色膠泥粘土質シルト (第3面)
- 11 青灰色粘土質シルト
- 12 青黑色粉質シルト
- 13 黑褐色粘土質シルト
- 14 黑褐色粘土質シルト
- 15 黑褐色細粒砂
- 16 青灰色粘土質シルト
- 17 灰褐色粘土質シルト
- 18 黑褐色膠泥粘土質シルト

- 河川1 ① 青褐色膠泥粘土質シルト
② 黑褐色粘土質シルト～細粒散砂～粗粒粉の互層
③ 黑褐色粘土質シルト
④ 黑褐色粘土質シルト
- 層2 ① 黑褐色膠泥粘土質シルト
② 黑褐色膠泥粘土質シルト
- 河川II ① 白灰褐色粉砂
② 黑褐色細粒砂
③ 黑褐色細粒砂に青灰色粘土質シルトの互層
④ 黑褐色細粒砂と青灰色粘土質シルトの互層
- 河川III ① 黑褐色膠泥粘土質シルトに灰黑色粘土のブロック
② 灰色細粒砂に青灰色粘土質シルトのブロック
③ 灰色細粒砂と青灰色粘土質シルトの互層
- 河川IV ① 青褐色粘土質粉砂
② 黑色シルト質粘土・礫混シルト・纖維細砂の互層
大體 ① 黃褐色膠泥粘土質粘土
② 塗灰褐色粘土質シルト泥層 (盆地・塗土?)
③ 黑褐色膠泥粘土質粘土 (#)
④ 黑褐色粉質シルト泥層 (#)

第5図 地層断面図(西壁・セクション)

第14層：青黒色砂質シルト、層厚0.1～0.2m。

第15層：灰青色極細粒砂、層厚0.2m前後。調査区西部に見られる。ラミナ構造が認められるところから、流水堆積層と考えられる。

第16層：青灰色粘土質シルト、層厚0.1～0.4m

第17層：灰褐色粘土質シルト、層厚0.1m前後。調査区西部に見られる。植物遺体を少量含む地層で湿地性の堆積層と考えられる。

第18層：黒褐色疊混粘土質シルト、層厚0.3m以上。締りの良い土壤化層で、遺構面の存在が示唆される。

2 検出遺構と出土遺物

ここでは主な検出遺構のみ記述することとし、法量・埋土等の詳細は、一覧表にゆだねる。

【第1面】

第1面は近世～近代の遺構面である。遺構検出は機械掘削終了後の第1層上面で行った。ここでは、河川2条(河川1・8)、土坑(土坑5・6)、溝6条(溝2～4・7・9・10)を検出した。

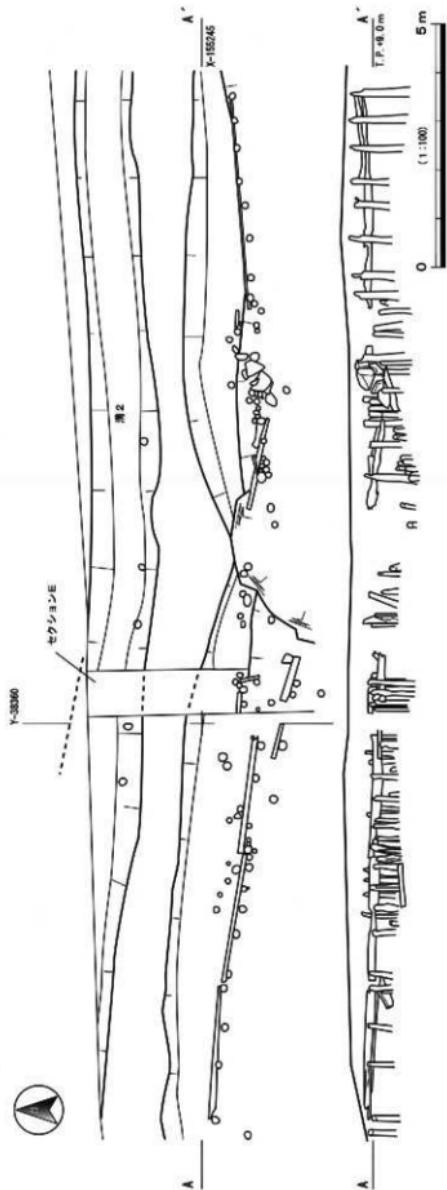
土坑5・6および溝2～4・9・10は耕作に関する遺構である。河川8はほとんどが擾乱と一致しており、詳細は不明である。

河川1

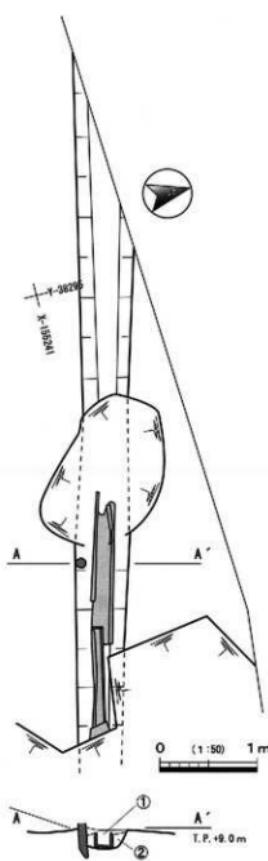
ほぼ東西方向に伸びる河川である。幅4m以上・検出長35m・深さ1.3m以上を測る。調査区内では幅は未確認であるが、5m以上になるものと考えられる。北岸には土留めや河川に平行する杭列や直交する杭列が構築されている。土留めは岸に沿って杭を打ち、杭と岸の間に横板を挟んだもので、釘や紐などで止めた痕跡はない。横板は転用材である。水際までいけるようにしたもののか、一部に石を積んだ部分がある。河川に平行する杭はA～B区北岸で検出したもので、これも土留め施設の痕跡かもしれない。河川に直交する杭列はC区東部で検出したもので、北岸の溝状の窪み(幅1m・長さ2m)の東西に沿って河川内部まで6本ずつ打ち込まれていた。橋・洗い場等の痕跡の可能性がある。

埋土は上層の①青黒色疊混粘土質シルトと下層の②青灰色粘土質シルト～極細粒砂～粗粒砂の互層に分かれ、肩に③暗青灰色粘土質シルト、肩から底にかけて④灰色粗粒砂へ疊が堆積している。主に②から近世の陶磁器類が出土しているが、①からは陶製十管、ガラス瓶などの近代の遺物も出土していることから、空港建設まで機能していた河川と考えられる。

遺物の出土量は多く、1～38(第10・11図)が出土している。1～5は陶器である。4はいわゆる京焼系の碗で、高台裏に「清水」の印刻がある。5は唐津焼系の碗である。6～18は肥前系の磁器である。6～14は碗、15は蓋、16・17は小皿、18は筒形碗である。6は網目文、7～8は雪持笹等の草花文を主とする文様、10の見込みにも草花文をモチーフにした文様が、いずれも手描きで表現されている。7・8の高台裏には圓線内に「銘」風の文様が描かれている。11～14はいずれも印判手で、11は体部に蕉・見込みに紅葉、12の体部には菊花と丸、13の体部と見込みには菊花、14の体部には丸文他が施されている。15は口縁部内面に四方櫛文、外側にも幾何学文様が描かれている。16の見込みには富士山に雁、17は無文で見込みに蛇の目釉剥ぎが見られる。小皿16・17は、ともに輪花状の口縁部を呈している。18の外側には草花文、見込みには印判手による五弁花がスタンプされている。



第6図 第1面河川1内杭出土状況平面図・立面図
(横断面図は第5図セクションEを参照)



第7図 第1面溝7 平断面図

19～22は神仏具と考えられる陶磁器である。19は御神酒徳利で、肩に刻目が施され、内面の下部に施釉されている。20はひょうそくである。21・22は受付きの燈明皿(受付皿)で、22は受部の切込みの形から、京都・信楽系の物と考えられる。

23～25は土師器(上製品)で、23は羽釜、24は風炉、25は火鉢である。26は連歯下駄で、後歯は欠損している。27は皆折釘である。28は粘板岩製のカケ硯である。29は型合わせ技法で作られた土製の鳩笛である。

30～36は瓦である。30・31は右巻三巴文軒丸瓦である。30の珠文は大きく、巴も太い。31の巴の尾は細く、一周して円形となる。32は近世の軒平瓦である。33は跡顎を持つ平安時代前期以前唐草文軒平瓦である。上外区・脇区に珠文をめぐらせる。34～36はいずれも1枚づくりの平瓦で、凹面は細かい筋目、凸面には縦位の繩目叩き目を施すもので、これも平安時代前期以前のものと考えられ、軒平瓦33と同時期のものである。33・34はともに二次焼成をうけており、破断面にまで煤が厚くこびりついていることから、破碎後転用され、長期間火を受けたものと推測される。

37は中世の瓦質土管である。38は内黒の黒色土器碗で、退化した高台が巡る。平安時代中～後期のものと考えられる。

溝7

東部のI・J区で検出した。東西からやや北にふって伸びる溝である。内部に木枠が埋設されている。河川8からの取水・排水施設と考えられる。底板・側板が遺存しており、蓋板は一部にのみ遺存していたが、全体に蓋があったかどうかは不明である。各板は、釘で止められている。

【第2面】

第2面は中世の遺構面である。ここでは河川3条(河川11～13)、大畦1条・水田を検出した。

河川11

調査区全域の南西側が河川11の範囲である。西部A～D区では北岸を河川1に切られている。中央部D～E区では河川12に切られており、詳細は不明であるが、概ね東西の流路をもつものと推定される。

河川12

D～I区で検出した。南東～北西に伸び、河川11を切っている。北肩で大畦を切っており、大畦との接点には大畦-①層が取り付いている。北壁際に深さ1.2mに達する掘込みがあり、④層ブロックで充填されている。③層から、土師器小皿(39～41)・黒色土器(42)・土師器鍋(43)・須恵器杯身(44)等が出土している。39～41は退化した「て」の字状口縁部をもつ土師器小皿で、平安時代末期頃のものである。42は大型の高台をもつ内黒の黒色土器碗で、平安時代後期(瓦器碗出現直前)のものと考えられる。43は舌状を呈する土師器鍋の把手、44は須恵器杯身で、ともに古墳時代中～後期(5世紀後半～6世紀前半)のものである。

河川13

I～K区で検出した。概ね南東～北西に伸び、大畦・河川12を切っている。G区以東では、大畦北側の第4層(作土)上面に、河川13の埋土が堆積していることから、河川13の氾濫によって水田が埋没したことがわかる。内部から土師器杯(45)・瓦器碗(46)・須恵器杯蓋(47)・杯身(48)が出土している。45は指押さえの圧痕が顕著に残る平安時代前～中期の土師器杯、46は鎌倉時代前期の瓦器碗、47・48は古墳時代中期(5世紀中頃)の須恵器杯蓋・杯身である。

大畦

E区以東、河川11の北側に位置する。西ほど規模が大きく、高い。途切れながらも、規模を縮小して東端まで伸びている。6層上面に礫の混ざった粘性の強い土を数枚盛って構築されている。大畦より北に水田作土があるが、平面的には検出できていない。また、大畦に取り付く小畔などは検出できなかった。盛土上部の①層から黒色土器柵(49)、下部の④層からは須恵器杯蓋(50)、杯身(51)が出土している。49は内黒の黒色土器柵で、内面のヘラミガキは密で体部と見込みを分化する。平安時代中～後期のものと考えられる。50・51は古墳時代後期(6世紀中頃)の須恵器杯蓋・杯身である。

【第3面】

平安時代頃の遺構面である。河川12・13で南西側は削平されている。検出遺構は、小穴14個(小穴21～26・31～35・41)、上坑2基(土坑27・36)、溝4条(溝37～40)、落込み1か所である。

調査区中央部のE～H区では、小穴を主とした遺構、東部のI～K区では溝を主とした遺構が構築されている。西部の遺構群は、極めて矮小な面積であるにもかかわらず、密に検出された。これらの遺構群は、居住域に直接深くかかわるものと考えられるが、明確にはできなかった。いずれの遺構も、土師質の極小片が少量出土した程度である。一方、北東端で検出した落込み-②層は水田作土の可能性のある粘土質シルトで、第9層上面にも水田が広がっていた可能性がある。

【第4面】

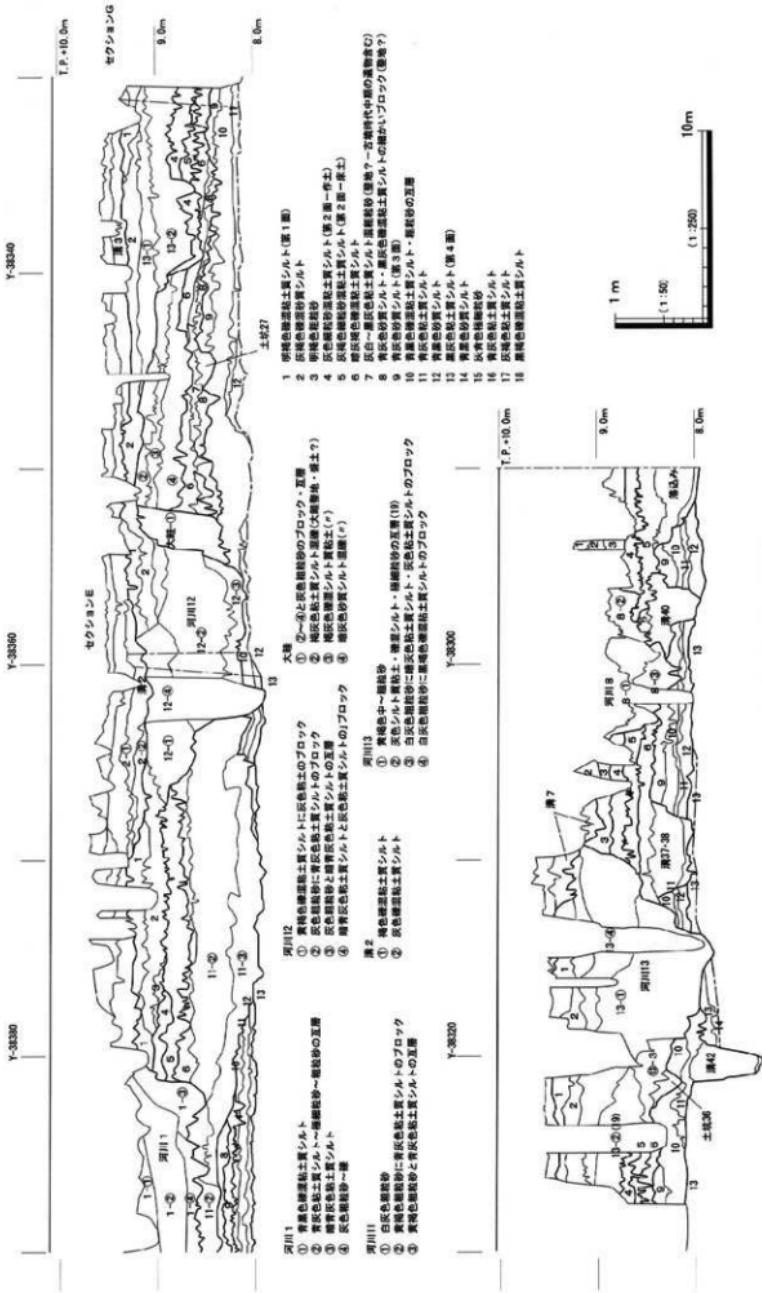
奈良時代以降の遺構面である。ここでは溝1条(溝42)を検出した。

溝42

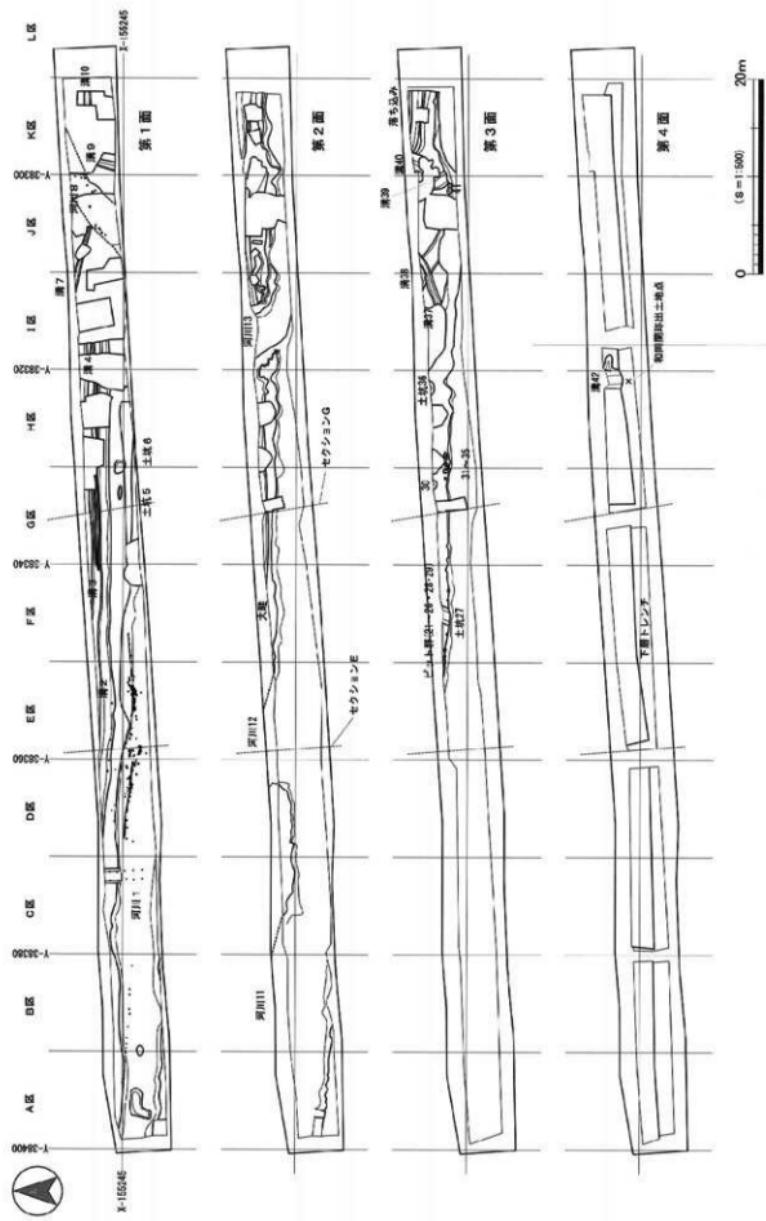
H区東端で検出した。ほぼ南北に伸びる。平面的な調査は行えなかつたため、詳細は不明である。埋土は礫が主で、ここからの湧水は夥しかつた。内部から、銅鏡「和同開珎」が出土した。「和同開珎」はポビュラーな古代の出土鏡であるが、今回出土の52はいわゆる「新和同」で、輪・郭が整然としており、文字も直線的である。径24～24.5mmを測る。

参考文献

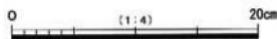
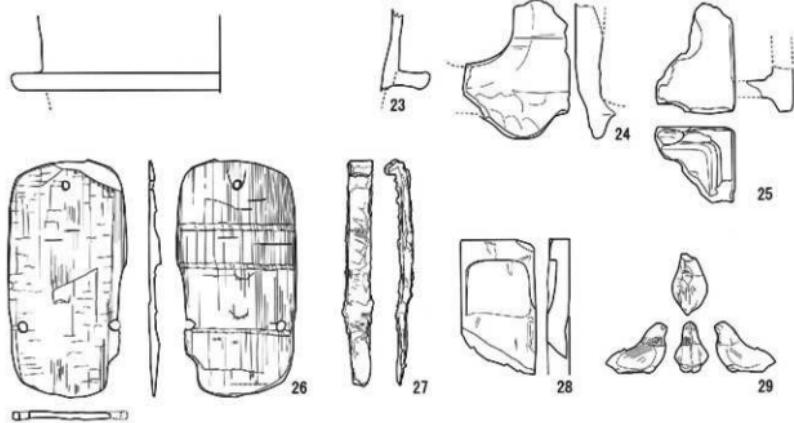
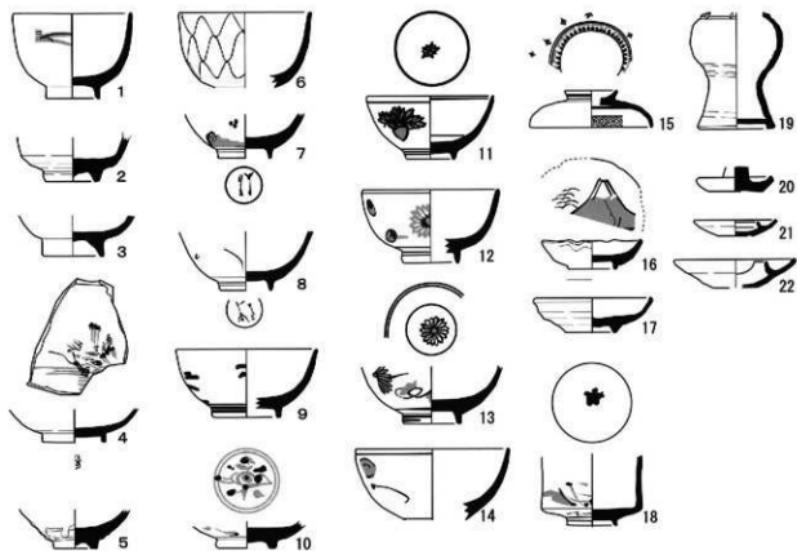
- ・中村 浩 1980「第6章 和泉陶邑塚出土遺物の時期編年」『陶邑III 大阪府文化財調査報告書 第30報』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- ・法隆寺昭和資料帳叢集委員会 1992『法隆寺の至寶 第15巻一昭和資料帳一』小学館
- ・中世土器研究会編 1995『中世の上器・陶磁器』真聯社
- ・兵庫埋蔵鏡調査会 1996『日本出土鏡總覽』
- ・九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年—九州陶磁学会10周年記念—』
- ・江戸遺跡研究会 2001『図説 江戸考古学研究辞典』柏書房
- ・小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年的研究—日本律令土器様式の成立と展開、7～19世紀—』



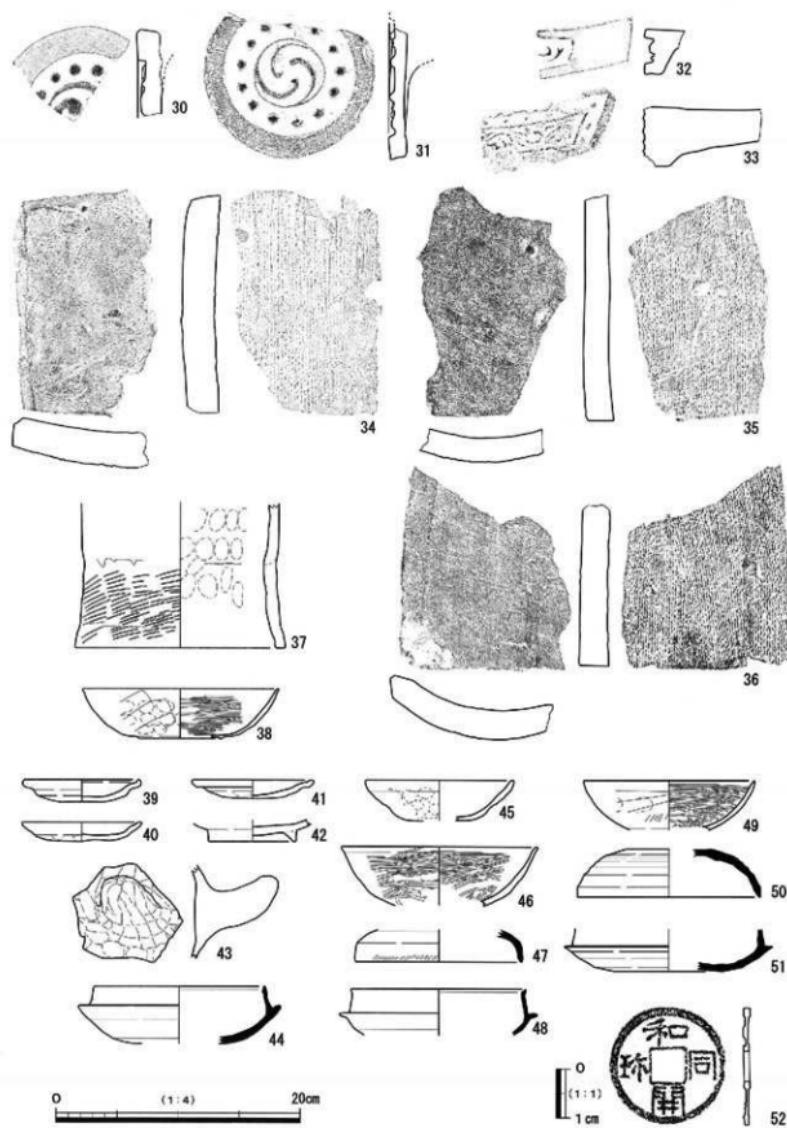
第8圖 地層斷面圖(北翼)



第9圖 平面圖



第10図 出土遺物実測図 1



第11図 出土遺物実測図 2

第2表 検出造塊一覧表

造塊名	地区名	形状・量等	種土	造物	備考
河川1 A~H	方舟 沖出井 東一帯	毎 35 4以上 L.3以上	① 青灰色泥質粘土質シルト ② 青灰色粘土質シルト～糊膜粘土～粗粒砂の互層 ③ 硫化鉄粘土質シルト	1~36	杭・横矢張り伴う
河川2 D~I	東一帯	50 0.8~ 0.5	① 黄褐色泥質粘土質シルト ② 灰色泥質粘土質シルト		細孔、透かし同一か?
河川3 E~I	東一帯	30 0.3~ 0.2~ 0.5	① 黄褐色泥質粘土質シルト ② 灰色泥質粘土質シルト		物理
河川4 H~I	東一帯	6 1 0.1	① 黄褐色泥質粘土質シルト ② 灰色泥質粘土質シルト		細孔
土坑5 G	平田 断面 逆三角形	後 0.35~ 0.18 1.3	潮水 ① 青灰色粘土質シルト～粗粒砂のブロック		
土坑6 G~H	病丸方舟	半円形 1.5~ 1.35	① 黄褐色泥質粘土質シルト		
河川7 I~J	方舟 沖出井 東西南北	毎 7 0.4~ 0.6~ 0.6	① 硫化鉄粘土質シルト ② 白灰色泥質粘土質シルトのブロック		河川8に含む?
河川8 J~K	市西一北戻	12.5 3 0.4~	① 青灰色泥質砂質シルト～粘土質シルトの互層 ② 灰色粘土シルト～糊膜粘土～植物遺体の互層 ③ 硫化鉄泥質粘土質シルト		杭を伴う
河川9 K	南北東一 北北東	2 0.7~ 0.9	0.05 ① 青灰色泥質砂質シルト～粘土質シルト～植物遺体の互層		河7と重交
河川10 K	東一帯	1.5 0.5~ 0.7	0.1 ① 成形粘土質シルト		河1の延長か?
河川11 B~C	方舟 沖出井 東一帯	毎 45 4個後?	① 白灰色粘土質 ② 黄褐色粘土質に青灰色粘土質シルトのブロック ③ 黄褐色粘土質に青灰色粘土質シルトの互層		河川12に切らされる
河川12 D~J	内一東	60 10 1.2	① 黄褐色泥質粘土質シルトに灰土質シルトのブロック ② 灰色粘土質に青灰色粘土質シルトのブロック ③ 灰色粘土質に硫化鉄粘土質シルトの互層 ④ 硫化鉄粘土質シルトと灰土質粘土質シルトのブロック	39~44	河川11・大陸を切る
河川13 F~K	南東一 北西北	25 8 1.2	① 黄褐色中一粗粒砂 ② 黄褐色シルト質粘土・糊膜シルト・糊膜砂の互層 ③ 黄褐色泥質粘土に硫化鉄粘土質シルト・灰土質シルトのブロック ④ 白灰色粘土質に黑褐色泥質粘土質シルトの互層 ⑤ 硫化鉄粘土質シルト	45~48	大陸を切る
大陸 F~K	東西	60 下端 2.0 上端 1.3	① ~④と同色相のブロック・互層 ⑤ 黄褐色粘土質シルト ⑥ 硫化鉄粘土質シルト ⑦ 黄褐色砂質シルト	29~49 全層 50~51付近	河川13に切らされる
小穴21 E	平面 半円形	断面 後 0.5 0.07	① 黄褐色泥多量粗粒二重シルト		
小穴22 E	半円形	0.5~ 0.17	② 青灰色～黒褐色粘土質シルト・粗粒砂のブロック		
小穴23 E	半円形	0.45~ 0.08	③ 黄褐色泥質粘土質シルト		
小穴24 F	半円形	0.35~ 0.17	① 黄褐色泥質粘土質シルト		
小穴25 F	半円形	0.3~ 0.16	② 黄褐色泥質粘土質シルト		
小穴26 F	半円形	0.25~ 0.05	③ 黄褐色泥質粘土質シルト		
土坑27 F	方舟?	半円形 1.6 0.15	④ 黑褐色泥多量粗粒二重シルト ⑤ 黑褐色泥質粘土質シルト ⑥ 硫化鉄泥質粘土質シルト		
小穴28 F	格内形	半円形 0.25 0.05	① 黄褐色泥質粘土質シルト		
小穴29 F	半円形	半円形 0.4 0.4	② 黄褐色泥質粘土質シルト		
小穴30 G	格内形	半円形 0.85 0.05	③ 黑褐色泥多量粗粒二重シルト		
小穴31 G	格内形	半円形 0.2 0.07	④ 黄褐色粘土質シルト		
小穴32 G	格内形	半円形 0.38~ 0.16	⑤ 黄褐色泥多量粗粒二重シルト		
小穴33 G	格内形	半円形 0.35 0.15	⑥ 黑褐色泥多量粗粒二重シルト		
小穴34 H	格内形	半円形 0.35 0.07	⑦ 黑褐色泥多量粗粒二重シルト		
小穴35 H	格内形	半円形 0.4~ 0.85	⑧ 黑褐色泥多量粗粒二重シルト		
土坑36 H	格内形	半円形 1.5 0.16	⑨ 黑褐色泥多量粗粒二重シルト ⑩ 黑褐色泥質粘土質シルト		
河川37 I~J	方舟 沖出井 東北東一 西西南	毎 9.2 0.7 0.1	⑪ 黄褐色粘土質シルト ⑫ 黄褐色粘土質シルト		濃緑と合流
河川38 I~J	南東一 北西	4.5 1.7 0.4	⑬ 黄褐色粘土質シルトの互層 ⑭ 黄褐色粘土質シルト		濃緑と合流
河川39 J~K	南北東一 北北東	1.7 1.2 0.3	⑮ 黄褐色粘土質シルト ⑯ 黄褐色粘土質シルトの互層 ⑰ 黄褐色		
小穴41 J	平面 断面	半円形 0.6~ 1.0 0.3	⑱ 黄褐色粘土質シルト		小穴2側か?
sondage K	方舟 南一北	6.4 1.5 0.45	⑲ 黄褐色粘土質シルト		作は土司の前代あり
sondage K	市一北	1.7 2.1 0.76	⑳ 黄褐色 ㉑ 黄褐色粘土質シルト	32	

第3表 出土遺物観察表

番号	器種	出土地点	法量(cm)			特徴
			口 径	器 高	底 径	
01	陶器碗	河川1	9.6	7.0	4.4	外面に染付けあり、疊付露胎
02	陶器碗	河川1	4.6	3.7	4.2	疊付露胎、兜巾高台
03	陶器碗	河川1	8.8	3.4	4.6	貫入あり、日砂付着
04	陶器碗 (京焼系)	河川1	—	残存高 2.7	5.1	見込みに風景、高台裏に「清水」の印刻、高台脇へ裏面露胎、貫入あり
05	陶器碗 (唐津燒系)	河川1	9.2	3.2	3.6	体部下半へ高台裏露胎、兜巾高台
06	磁器碗	河川1	10.1	残存高 6.1	—	網目文
07	磁器碗	河川1	—	残存高 3.6	4.2	手書きの草花文、高台裏同様内に跡あり、疊付露胎
08	磁器碗	河川1	—	残存高 4.8	4.0	手書きの草花文、高台裏同様内に跡あり、見込みに蛇の目釉剥ぎ、疊付露胎
09	磁器碗	河川1	11.2	5.6	5.2	手書きの草花文
10	磁器碗	河川1	—	残存高 2.2	4.6	外面・見込みに手書きの草花文、疊付露胎
11	磁器碗	河川1	10.2	5.1	3.8	印判手 外面蕉葉、見込みの圓線内に紅葉、蛇の目釉剥ぎ、疊付露胎
12	磁器碗	河川1	4.4	6.0	4.4	印判手 外面菊花・丸、疊付露胎
13	磁器碗	河川1	—	残存高 4.7	4.4	印判手 外面菊花他、見込みの圓線内に菊花、疊付露胎
14	磁器碗	河川1	12.4	残存高 5.8	—	印判手? 外面丸他、見込みに圓線
15	磁器蓋	河川1	9.7	3.0	4.0	外面つまみ際に 文、体部に菱形、内面口縁部に四方捺文
16	磁器皿	河川1	7.3	2.2	3.6	見込みに富士山、輪花口縁
17	陶器皿	河川1	9.2	2.8	4.2	輪花口縁、見込みに蛇ノ目釉剥ぎ
18	磁器筒形瓶	河川1	—	残存高 5.6	4.0	風景・草花文? 見込みの圓線内に五弁花
19	陶器花瓶 (脚付酒器用)	河川1	最大径 7.6	残存高 9.6	6.0	外面露胎
20	陶器灯明皿 (ひょうそく)	河川1	6.0	残存高 2.0	4.4	灯心部上端欠損
21	陶器灯明皿 (受付皿)	河川1	6.8	1.3	3.2	外面露胎
22	陶器灯明皿 (受付皿)	河川1	9.8	2.3	3.6	外面露胎、受部に切り込みあり
23	土師器羽釜	河川1	鈎 径 34.0	残存高 6.7	—	ヨコナデ
24	土師器風炉	河川1	現存幅 8.5	残存高 10.3	—	指ナデ
25	土師器火鉢	河川1	現存幅 6.4	残存高 8.9	—	指ナデ

番号	器種	出土地点	法量(cm)			特徴
			口径	器高	底径	
26	下駄	河川1	長さ 19.5	幅 9.1	厚さ 1.0	逆曲下駄、後歯欠損
27	鉄釘	河川1	長さ 18.5	幅 2.0	厚さ 1.8	皆折釘
28	硯	河川1	長さ 11.0	幅 6.0	厚さ 1.8	粘板岩製、カケ硯
29	土人形 (馬頭)	河川1	高さ 4.1	幅 2.2	長さ 4.9	型合わせ技法
30	軒丸瓦	河川1	瓦当幅 13.5	瓦当面のみ 2.2	外縁幅 2.2	左巻き三巴文、珠文は13個(4個残存)
31	軒丸瓦	河川1	瓦当幅 13.4	瓦当面のみ 1.9	外縁幅 1.9	左巻き三巴文、珠文は13個
32	軒平瓦	河川1	瓦当幅 7.8	瓦当面のみ 0.7~4.9	外縁幅 0.7~4.9	唐草文か?
33	軒平瓦	河川1	瓦当幅 11.1	瓦当面のみ 1.5~2.0	外縁幅 1.5~2.0	内区唐草文、外区珠文、節頭
34	平瓦	河川1	—	残存長 17.8	残存幅 11.1	凹面布目、凸面綱目タタキ
35	平瓦	河川1	—	残存長 17.8	残存幅 11.1	凹面布目、凸面綱目タタキ
36	平瓦	河川1	—	残存長 17.8	残存幅 11.1	凹面布目、凸面綱目タタキ
37	瓦質土管	河川1	—	残存高 11.8	—	外面タタキ・ナデ、内面指押さえ・ナデ
38	黒色土器碗 (内黒)	河川1	—	残存高 4.1	6.6	外面指押さえ、内面密なヘラミガキ(体部と見込みを分化)
39	土器小皿	河川1	—	残存高 1.8	3.3	ナデ、ヨコナデ
40	十師器小皿	河川1	—	残存高 1.5	5.4	ナデ、ヨコナデ
41	土器小皿	河川12	—	1.6	3.9	ナデ、ヨコナデ
42	黑色土器碗 (内黒)	河川12	—	残存高 1.8	6.8	内面ヘラミガキ
43	土師器鉢	河川12	—	—	—	ハケか?
44	須恵器杯身	河川12	14.8	残存高 4.7	16.6	回転ケズリ、回転ナデ、外面受部に自然釉、別固体溶着
45	土器杯	河川13	—	—	—	外面指押さえ
46	瓦器碗	河川13	16.0	残存高 4.8	—	外面指押さえ後や粗いヘラミガキ、内面密なヘラミガキ(体部と見込みを分化)
47	須恵器杯蓋	河川13	13.5	残存高 2.7	—	回転ケズリ、回転ナデ、外面口縁部にハケ状の圧痕あり
48	須恵器杯身	河川13	14.2	残存高 3.8	16.2	回転ケズリ、回転ナデ
49	黒色土器碗 (内黒)	F区大畦上部	13.8	残存高 4.0	—	外面指押さえ、内面密なヘラミガキ(体部と見込みを分化)
50	須恵器杯蓋	J区大畦下	15.0	4.8	—	回転ケズリ、回転ナデ
51	須恵器杯身	J区大畦下	17.3	残存高 3.5	17.0	回転ケズリ、回転ナデ

第3章　まとめ

今回の調査では奈良時代から江戸時代に至るまでの4面の遺構面を検出することができた。調査対象とした遺構数は37、遺物量は整理用コンテナ4箱分である。

主な成果は中世から近世にかけての耕作面と河川の復元であり、氾濫堆積物に覆われて中世の大畦(第2面)が残存していたことが特筆される。本報告では、「大畦」としたが、河川11に伴う「堤」とも呼べる遺構である。北側壁面(第8図)に見られるように、河川12との接点(Y-38352~38355付近)には、大畦の流出土あるいは川渡え時の土が貼付いたような状態となっていることがわかる。大畦は盛土で構成されており、盛土内部には古墳時代中~後期や平安時代の遺物(49~51)が含まれていることから、近隣にあった過去の集落域の土を利用していることがわかる。大畦・河川11はほぼ東西に伸びており、ともに条里制地割に則った遺構である。また、同様に第1面で検出した近世の河川1も条里に規制され、流路を固定された川といえる。ただし、いずれも大規模な遺構であるにもかかわらず、第3図に見られるように、坪境には一致していない。

遺物は、古墳時代中期・後期・奈良時代・平安時代・鎌倉時代・江戸時代のものが出土しているが、全体としての遺物量は少なく、その大半は河川・溝からの出土であり、地層や遺構の時期を決定するには乏しいといえる。そのなかで、唐草文軒平瓦(32)・平瓦(33~36)・和同開珎(52)が特筆に値する。唐草文軒平瓦・平瓦は、平安時代前期以前、奈良時代にまで遡り得る資料であり、和同開珎52の出土とともに相俟って、調査地近隣に当該時期の瓦葺の建物が存在した可能性を高める資料である。あえて建物の位置を求めるならば、河川1・溝42の上流東方~南方に求めることができる。また、河川1からは、古墳時代中~後期の遺物の出土もあり、近隣の調査地との繋がりを示している。

最後に本調査地における土地利用の変遷を概観して今回の調査のまとめとしたい。

第4面では溝42が検出された。遺構面は自然地形と捉えられ、東が高く西が低い。溝はほぼ南北に伸びる、溝を挟んで東が1段高くなることから、これも条里制地割に則った遺構の可能性がある。この面は、氾濫堆積物である第10層によって廃絶する。

第3面では、西部で小穴群・土坑、東部で溝を主とする遺構を検出した。西部は生活に密着した場であったと考えられ、東部は水田の可能性がある。第3面廃絶後、西部の9層上面は、第6~8層によって、整地が行われる。第3面の時期は明確にし得ないが、第4面で和同開珎が山上していること、第2面大畦盛土内の出土遺物から、奈良時代以降平安時代中期以前と言える。

第2面では、東西流する河川11とそれを切る河川12・13・大畦が検出された。大畦は整地層上部に盛土によって造られ、その北側に水田が作られる。大畦盛土内部上層から、平安時代中~後期の遺物が出土していることから、その造営はそれ以後と言える。ただし、長期間存続していた可能性は高く、当初の造営時期は遡る可能性は高い。この水田は河川13の氾濫によって埋没するが、大畦のピークまでは埋まりきらなかったようである。河川13からは鎌倉時代前期の瓦器碗46が出土していることから、第2面埋没の時期はそれ以後といえる。

第1面では、河川・耕作溝・土坑が検出された。河川1は第2面河川11の上部にあたり、規模を縮小して、ほぼ同様の流路をもつ。同時に河川1北側には耕作地が広がり、安定した状況下で連綿と水田耕作が続けられることになる。

そして、昭和13(1938)年の「阪神飛行学校(現八尾空港)」の設営と、翌年の「大正飛行場」への改称に伴う大規模な拡張とを契機に、調査地周辺は大きく改変されることになり、長らく受け継がれてきた条里制区画に則った農村は放棄されることになる。さらに、第2次世界大戦後、空港周辺は市営住宅を主とする住宅街に変貌していった。

参考文献

- ・原田昌則他 1984『木の本遺跡一八尾空港整備事業に伴う発掘調査一』(財)八尾市文化財調査研究会報告4
(財)八尾市文化財調査研究会
- ・西村公助 1993「30.八尾南遺跡第18次調査(YS92-18)」「平成4年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・島田裕弘 2007『八尾南遺跡(第27次調査)』(財)八尾市文化財調査研究会報告102 (財)八尾市文化財調査研究会 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・大阪航空局八尾空港事務所 2005『八尾空港へようこそ』



第1面西部(西から)



第1面東部(東から)



第2面西部(西から)



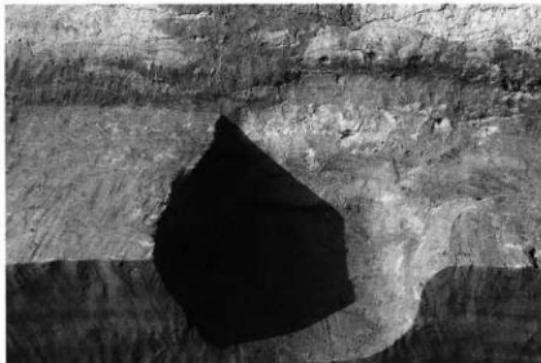
第2面東部(東から)



第3面西部(南から)



第3面東部(東から)



第4面溝40(南から)



和同開珎出土状況(北から)



同上拡大(北から)

図版五 調査前～第一面西部



調査前の状況(東から)



機械掘削の状況(西から)



調査杭設置(北東から)



人力掘削開始(南西から)



A区河川1掘削(南西から)



A区河川1上層遺構(北東から)



E区河川1杭周辺掘削(南西から)



第1面平板測量(西から)

図版六
第一面中央・東部



D～F区河川1下層杭検出状況(南西から)



E～F区同(南西から)



E区同(北西から)



E区同(南東から)



J区溝7検出時(南から)



溝7完掘(北西から)



溝7トレンチ掘削(南東から)



J区河川18掘削(西南から)



E区河川12掘削(南東から)



F区同(東から)



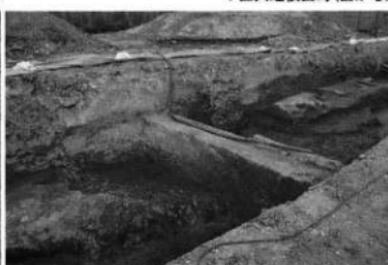
I区河川13掘削(南西から)



I区大畦検出時(西から)



H区以東河川12・大畦(南西から)



H~I区河川13・大畦(南西から)



J~K区河川13・大畦(南西から)



セクションG東面(南東から)

図版八 第三面～第四面



E～F区大畦第3面へ人力掘削(南東から)



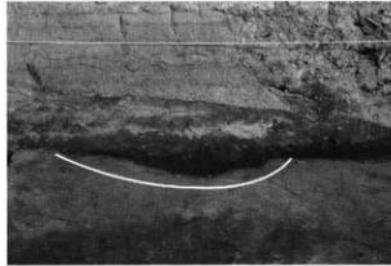
I～J区同(南東から)



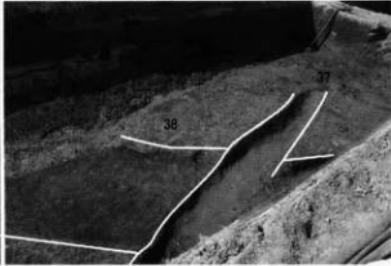
J～K区同(北西から)



土坑27・小穴28・29(北から)



土坑36(南から)



溝37・38(北東から)

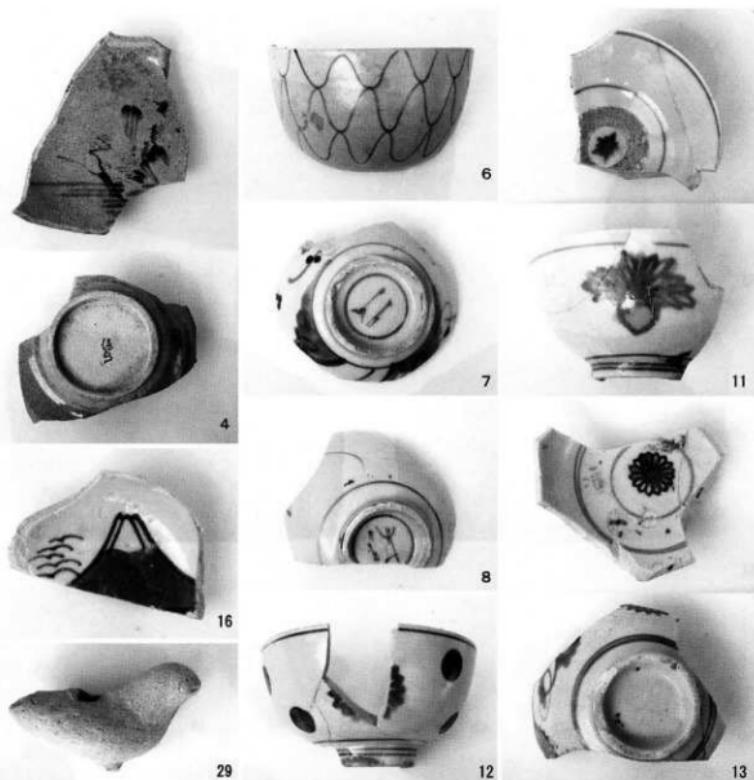


北側壁面実測(南東から)

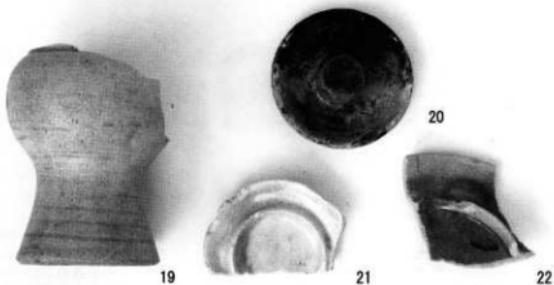


G区溝40周辺平板測量(南東から)

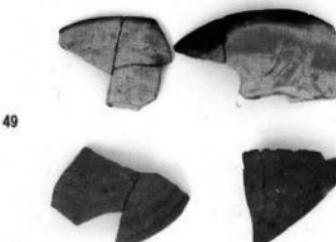
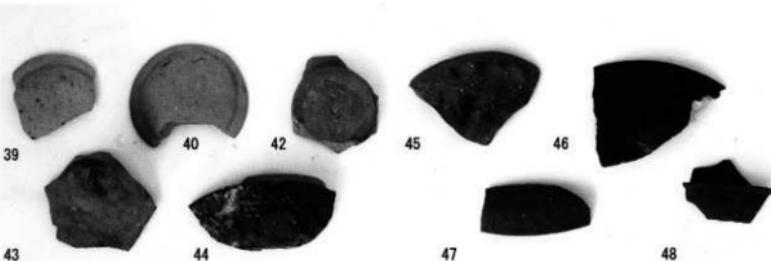
圖版九 出土遺物一



河川1出土遺物



圖版十
出土遺物



河川 1 出土遺物 (33・34)
河川12出土遺物 (39・40・42~44)
河川13出土遺物 (45~48)
大畦盛土内出土遺物 (49~51)
溝42出土遺物 (52)

報告書抄録

ふりがな	ざいだんほうじん やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく
書名	(財)八尾市文化財調査研究会報告114
副書名	八尾南遺跡(第28次調査)
巻次	
シリーズ名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	114
編集者名	成海佳子
編集機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町四丁目58-2 TEL・FAX 072-994-4700
発行年月日	西暦2008年3月19日

所 取 道 跡	所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
やおみなみいせき 八尾南遺跡 (第28次調査)	おおさかふ やおしにしき もと 大阪府八尾市西木の本	27212	67	34度35分 05秒	135度35分 47秒	2007年02月06日 ～ 2007年03月30日	約724	道路整備

所 取 道 跡 名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項	
		集落	奈良時代			和同開珎	
八尾南遺跡 (第28次調査)	集落	平安時代(前半)		土坑・小穴・溝	—		
	生産域	平安時代(後半)		河川・大畦・水田	古式土師器・土師器・須恵器・黒色上器・瓦器		
	生産域	江戸時代		河川・土坑・溝	国産陶磁器・土師器・土製品・下駄・釘・碇・瓦		
	要約	奈良～江戸時代を通じて、条里地割りに則った溝・河川等が検出された。和同開珎や古代瓦の出土は、近隣に当該時期の建物等の存在を示唆している。平安時代(後半)の大畦は、「堤」ともいえる大規模なもので、前時代の生活面を整地して造られており、土木技術の一端が窺える。また、大畦盛土内からは、占墳時代中期に遡る遺物の出土もあり、既往調査調査の成果を裏付けることができた。					

財団法人八尾市文化財調査研究会報告114
八尾南遺跡(第28次調査)

発行 平成20年3月
編集 財団法人八尾市文化財調査研究会
〒581-0821 大阪府八尾市幸町四丁目58番地の2
TEL・FAX 072-994-4700

印刷 株式会社 近畿印刷センター

